

自分のもっている力を駆使してコミュニケーションを図る子ども

— インターナショナルゲストに日本文化を紹介しよう —

1 単元のねらい

英語落語などの工夫を参考にし、日本文化の魅力を海外の人にわかりやすく伝える。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえと資質・能力について

本学校園英語科では、子どもに備えさせたい資質・能力を、「知っている語彙や表現を活用して、聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを話したり書いたりするコミュニケーション能力」ととらえている。また、その能力を支えるものとして、「相手意識・目的意識をもって、外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」が不可欠だと考えている。以下に示すふりかえりは、1学期の英語学習「Unit2 週末などの予定について対話しよう」において、単元のまとめとして振り返ったものであり、上記で述べたような資質・能力と関わる記述が見られる。

ペアで話すのは、何も打ち合わせをせずにするものだったのでとても難しかったです。でも、今まで習ってきた表現を活用して質問を考えたり、答えたりできたのでよかったです。 (生徒A)

この単元を通して、英語で人と話すことが楽しいと感じることができました。英語の文法はメチャクチャだったけれど、手とかを使って会話を楽しみながら、話すことができました。でも、助け船を出すことができず心残りに思いました。優しい心で会話していきたいです。 (生徒B)

このような記述から、自分の考えを即興的に話すことの難しさを感じつつも、何とか知っている語彙や表現を活用して伝えようとする姿勢がうかがえる。また、そのような姿勢をもとに、互いの考えをやり取りすることの楽しさを感じつつある。そこで本単元の学習を通して、自分が伝えたい内容が伝わっているか確認しながら話すなど、相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度を育てたいと考えている。

本単元では、日本文化の一つである落語が題材に取り上げられている。対話の中で、落語は手ぬぐいとせんすを効果的に用いて場面の様子を表現することが説明されている。また、落語の魅力の世界に伝えるために、小話の中に出てくる日本のものや地名を、現地の人にとってわかりやすくかえるエピソードも紹介されている。そのため、何かをわかりやすく伝えるための工夫や、異なる文化的背景をもつ相手とのコミュニケーションについて考えるのに適した単元といえる。このような単元の学習指導を通して、相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度をもとに、知っている語彙や表現を活用して考えをわかりやすく伝える力を育てることができる考える。

(2) 資質・能力を育むために

本単元では、英語落語などの工夫を参考にし、日本文化の魅力を海外の人にわかりやすく伝えることを目標とした。この目標に到達するための学習過程において、英語科で目指す資質・能力を身に付けるために、次の3点を指導のポイントとする。

① 相手意識や目的意識が明確になる単元構想の工夫

本学校園で12月に行われるEnglish Dayにおいて、海外からのゲストに落語や俳句などの日本文化についてプレゼンテーションすることを、単元の目標として活動する。教科書の本文の内容を理解する際にも、日本文化を紹介する際の工夫としてどのようなことが考えられるかという視点で聞いたり読んだりできるように支援を行いたい。

※ English Day=毎年12月に行っている。本校近隣に生活する外国の方16名をゲストとして招き、ゲストに英語でワークショップをひらいてもらったり、生徒がゲストに対してプレゼンテーションなどを行ったりする授業。生徒は8～10人のグループに分かれ、25分間ずつ3ローテーションで、3人のゲストと交流する。

② 既習事項を用いて「その場で考えて話す」活動の設定

単元の目標となる活動においては、一方的な発表に終始するのではなく、ゲストとの対話も取り入れることで単元の目標に迫れるようにしたい。対話においては、即興的に相手の質問に答えたり、相手の理解を確かめたりする必要がある。そのため、日本の文化などその場で示されたトピックについてペアで対話する活動を、帯活動として取り入れたい。

③ 主体的な学びにつなげる見通しとふりかえりの工夫

単元の最初に目標を示し、そのためにどのような表現や工夫を学びたいかを考える場面を設定する。そして、使えそうな表現や工夫を授業の中で随時メモできるふりかえりシートを活用できるようにする。単元の学習が進むにつれて目標の達成に近づいていることを生徒が実感し、分かったことや分からなかったことを明確にしたりしていくことで、生徒が主体的に学べる学習にすることができると考える。

3 展開計画（全10時間）

時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	○単元のゴールについて知る。 ・S.Oを読んだり落語の映像を視聴したりして、落語について知る。 ・落語など、日本文化の魅力を海外の人に伝えるためには、どのような表現や工夫が必要か考える。	◇日本文化の魅力を伝えるための工夫や表現について、自分なりの課題意識をもっている姿
2・3	○日本文化について説明するための表現や工夫を、本文から学ぶ。 ・There is(are)～の表現を練習する。 ・Dialogの内容を理解し、落語で使われるジェスチャーなどの工夫について知る。 ・相手の理解を確かめるなど工夫しながら話す。	◇日本文化について説明する際に、相手の理解を確かめるなど工夫しながら話している姿
4・5・6	○落語を海外の人に理解してもらうための工夫について知る。 ・動名詞の表現を練習する。 ・英語落語を聞き、内容を理解する。 ・日本のものを海外の人にわかりやすく伝えるための工夫について読み取る。	◇日本文化の魅力を海外の人に理解してもらうための工夫や表現について、本文から探そうとしている姿

7・8	<p>○自分が紹介したい日本文化を選び、これまで学んだ表現や工夫をいかして、プレゼンテーションする準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本などから日本文化についての情報を得る。 ・相手が理解できるようなプレゼンの工夫について考える。 	<p>◇日本文化の魅力を伝えるために、これまで学んだ表現や工夫をいかそうとしている姿</p> <p>〔例：There is (are)～.を用いた表現による導入，物を用いたジェスチャー，相手が知らないであろう言葉の言い換え，相手とのやり取り〕</p>
9	<p>○クラスでプレゼンテーションのリハーサルをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで発表し，相互評価する。 ・他グループからもらった評価をいかして，内容を修正する。 	<p>◇日本文化の魅力を伝えるために，これまで学んだ表現や工夫をいかして，プレゼンテーションしている姿</p>
10	<p>○ English Dayにおいて，海外からのゲストに日本文化について紹介する。</p>	<p>◇日本文化の魅力を伝えるために，前時の評価を踏まえながら，これまで学んだ表現や工夫をいかして，プレゼンテーションしている姿</p>

4 授業の実際

2 (2) で述べた指導のポイントの3点から，本単元の授業の実際について述べる。

(1) 相手意識や目的意識が明確になる単元構想の工夫

教科書中に，日本人中学生の光太 (Kota) がカナダからの留学生アレックス (Alex) に，落語について説明する次のような場面がある。

Alex : What is rakugo like?

Kota : Well, one performer plays several different characters.

Alex : Wow. Is there a special stage set?

Kota : Yes, there is. But it's simple. There's only a cushion.

Alex : Are there any props?

Kota : Yes, there are. A fan and a hand towel.

The performer uses them in different ways.

出典：New Horizon English Course 2 (東京書籍)

このやり取りにおいて，アレックスにとってより分かりやすくしたり，アレックスの興味をひいたりするためにどのような工夫ができるかを考えさせることで，相手意識をもたせるようにした。

次に示すのは，生徒が考えた内容の追加や工夫点 (下線部分) の例である。

Alex : What is rakugo like?

Kota : Well, one performer sits and plays several different characters.

For example, a child, an old man, a dog and so on.

Alex : Wow. Is there a special stage set?

Kota : Yes, there is. But it's simple. There's only a cushion.

We call the cushion zabuton. We use it to sit on the floor.

Alex : Are there any props?

Kota : Yes, there are. A fan and a hand towel.
The performer uses them in different ways.
The performer uses the fan like chopsticks. (ジェスチャーを見せる)

生徒が考える際に、カナダ出身のアレックスがクッション (cushion) やファン (fan) と聞いてどのようなものを思い浮かべるのかなどと問いかけ、相手意識をもたせるようにした。ゲストの文化的背景を踏まえて、言葉の説明を加えたり、ジェスチャーを活用したりする工夫を考えることができた。

(2) 既習事項を用いて「その場で考えて話す」活動の設定

単元の中で複数回、即興的に話す活動を取り入れた。例えば、ペアによる日本文化クイズである。配られたカードの写真についてペアの相手にヒントを出し、相手はそれが何かを当てる。その後、学級全体で使った表現を共有する。次に生徒の発話の例を示す。

- 例1 It's Japanese stage show.
Face is white.
Only men play. (「歌舞伎」が答えのクイズ)
- 例2 There are two big men on the stage.
Hair style is interesting.
Only two weeks.
My father likes the sport. (「相撲」が答えのクイズ)

文法的な誤りや表現に改善すべき点は多くあるものの、自分の知っている語彙表現を活用して伝えようとする意欲が見られる。準備してから話す活動に終始すると、どうしても日本語で考え、辞書をひき、その結果として、既習事項を使いこなす機会を十分にもつことができない傾向にある。しかし、このような活動を継続的に取り入れることで、生徒が自分のもっている力を駆使して、即興的に話す力を養うことができた。

(3) 主体的な学びにつなげる見通しとふりかえりの工夫

単元を通したふりかえりシート (図1) を活用し、常に単元の目標に立ち返りながら、何を学ぶ必要があるかを考えられるように、授業のふりかえりを工夫した。例えば日本文化クイズの後、言いたかったけれど言えなかった表現などをふりかえりシートに記入して提出する。次時の初めにそれを示し、何と言えよいかをみんなで考える。次に示すのは、着物について説明する際に言いたかったけれど言えなかった表現として、「おめでたいときに着る」と書いていた生徒のふりかえりを取り上げ、みんなで考えた際のやり取りである。

- T : 誰が着るの? 主語は?
S : WeとかJapanese people, You
T : You wear it . . . おめでたいときって何て言うのかな?
S : happy
T : じゃあhappy days . . . happy daysの前は?
S : in? onか!
T : You wear it on happy days. でもお葬式の時にも着るよね。「特別な日」だったら?
S : special days
T : OK. special occasionsという言い方もあるよ。

このようにして、単元のゴールとなる活動で必要となる語彙表現が蓄積されていき、生徒は目標に向かって学習していることを実感できる。それにより主体的に学ぼうとする姿勢をもち、プレゼンテーションの準備をすることができた（図2）。

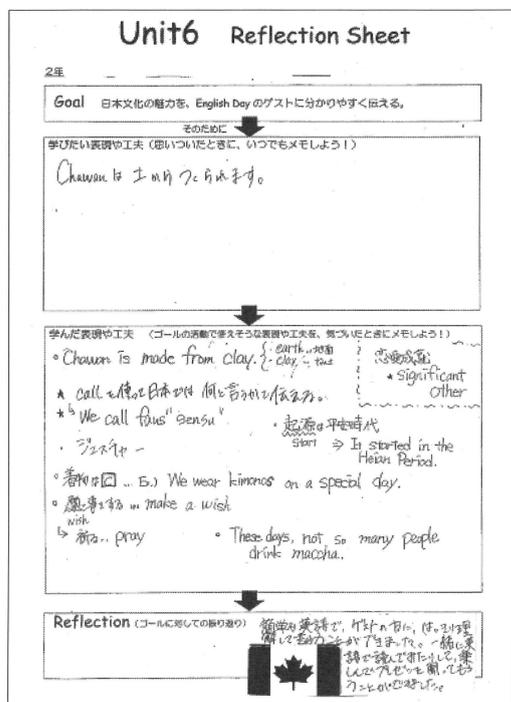


図1：単元のふりかえりシート



図2：グループでプレゼンの準備



図3：English Dayにおけるプレゼンの様子

5 おわりに

English Dayでは、日本の遊びやひらがなの成り立ちなど、各グループが多岐にわたって日本文化を紹介した（図3）。生徒はEnglish Dayでの発表を振り返って、「ゲストの〇〇さんが知らないことは思ったより多くて、“I didn't know that!”と言われたときに、うまく説明が伝わったと思ってうれしかった」「ゲストの方が途中で質問したり感想を言われたりしたけど、臨機応変に“That's right!”などと応答でき、プレゼンが一方向的にならずにお互い楽しめたと思う」などと書いていた。それぞれのプレゼンテーションにおいて、生徒は教科書を通して学んだ表現や工夫を駆使して話すことができた。また、相手の理解を確かめたり、相手の国のことを尋ねたりしながらプレゼンテーションする姿が多く見られた。

本学校園英語科では、子どもに備えさせたい資質・能力を「知っている語彙や表現を活用して、聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを話したり書いたりするコミュニケーション能力」と「相手意識・目的意識をもって、外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」であるととらえ、そのために必要な手立てを考えてきた。本単元の学習を通して、子どもはこれらの資質・能力を備えつつあると感じている。

一方、活動のふりかえりとして、「自分が日本のことについてあまり知らないことに気付いた」と書いた生徒も少なからずいた。授業者の手立てとして、生徒がどう伝えるかを考える時間の設定に加え、何を伝えるかを深めていけるように場面の設定を行いたい。そのためには今後、他教科等の学習内容を英語の時間にかすなどの工夫をしていきたい。

（文責 鎌田 真由美）